

実践レポート

立命館大学文学部における教育の特質および課題

— 多面的な学習成果の検証を通じて —

岡 本 伸 也・小 野 勝 大
川那部 隆 司・坂 下 史 子

要 旨

立命館大学文学部は、学園ビジョン R2020 が目指す「学習者中心の教育」を推進し、小集団科目や卒業論文を中心とする探究型の学びを実践してきた。グループワークや共同発表等の取り組みを充実させ、専門的な知識の習得のみならず、専門的な学びの基礎となる汎用的な技能（ジェネリックスキル）の育成についても初年次教育や小集団科目を中心に取り組んできた。一方で、文学部の正課の取り組みが学生のどのような能力向上に寄与しているか、学習成果の十分な検証はなされていない。本稿では、①主な成績評価指標である GPA が学生のどのような能力を評価しているのか、そして②文学部の正課に「まじめ」に取り組んだ学生はいかなる能力が向上し、逆にいかなる能力が向上し難いのかの2点について、文学部生の1回生時と3回生時の GPA と「PROG」テスト結果の比較分析から検証する。本検証結果をもとに、今後の文学部における教学改善の施策を提案する。

キーワード

文学部、Institutional Research (IR)、学習成果検証、ジェネリックスキル、リテラシー、コンピテンシー、GPA、進路就職

1 はじめに

立命館大学は、学園ビジョン R2020 の基本目標の中で、「学習者中心の教育」を掲げ、多様なコミュニティにおける主体的な学びの展開を推進している。その中で文学部は、「人文学の諸分野の教育研究を通じて、世界の様々な文化や人間についての幅広い知識を身につけ、広い視野のもと、人間や社会が抱える問題の究明・解決ならびに、世界の発展に主体的に貢献できる人材を育成すること」を人材育成目的とし、人文学の広く深い専門知の修得に加えて、自分の意志・判断に基づいて能動的に学ぶ力の育成を重視している。この目的を達成するため、文学部のカリキュラムは、小集団科目と卒業論文を軸に構成されている。学士課程の1・2回生時に全員が受講するセミナー式小集団科目（1回生時は「研究入門」、2回生時は「基礎講読」）の中で、学生たちがグループ・プロジェクト、共同発表、ディスカッションを通じて仲間と協働することで主

体性を身に付け、同時に3・4回生ゼミナール（専門演習）や卒業論文へとつながる知的好奇心を喚起するとともに、各分野の研究方法を獲得するための教育を展開している。

また文学部は、高等教育のユニバーサル化による入学者の質的变化や入試状況等に対応する形で、新たな初年次教育の枠組みとして、2012年度より複数専攻を束ねた学域制度を導入した。これにより学生は、入学時は学問分野の大きな括りである学域に所属し、2回生進級時に興味・関心に合わせて学域の中の専攻を選択する仕組みとなった。学域・専攻制度の導入と同時に、学生が学習者として自立する上で不可欠なジェネリックスキル（汎用的技能）の習得を目的に、1回生全員が受講する科目「リテラシー入門」を改編し、4つの資質（スチューデントスキル、インフォメーションスキル、ライティングスキル、キャリアスキル）の養成を到達目標とした。

教育行政の動向としては、2007年の学校教育法の改正で学力の要素として「基礎的な知識及び技能」、「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力」、「主体的に学習に取り組む態度」の3点が法律として規定され、従来の「学力＝知識・技能」という考え方からの転換が図られた。高等教育政策では、2008年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」で、「グローバルな知識基盤社会や学習社会において、学問の基本的な知識を獲得するだけでなく、知識の活用能力や創造性、生涯を通じて学び続ける基礎的な能力を培うことが重視されつつある」と述べられ、ジェネリックスキルの養成と評価の必要性が説かれた。2010年以降の文学部の教育改革は高等教育政策の動向とも少なからず合致している。

以上の観点より、文学部の人材育成目的を到達点とする小集団科目や卒業論文、そして初年次教育を中心とした学部教育の取り組みを評価するためには、学生のジェネリックスキルを測定し、検証する必要がある。一方、現状の学習成果を検証する主たる指標はGPA（Grade Point Average）であるが、文学部のGPAが学生のジェネリックスキルを適切に反映した評価指標として有効か否かについて未だ検証はなされていない。

本稿では、ジェネリックスキルの客観的測定方法として開発された「PROG」テストと既存の評価指標であるGPAの比較分析を行うことで、文学部のGPAが学生のどのような能力を評価している指標であるのかを明らかにする。その上で、学生の「PROG」テストの結果とGPAの経年変化を比較分析し、文学部の正課（単位履修を伴う講義や演習などの授業）による学習成果の検証を行うとともに、検証結果を今後の教育改善へつなげることを目的とする。

2 「PROG」テストの導入について

学生の成績評価の主な指標として挙げられるGPAは、立命館大学でも導入されている。成績評価を独自の換算方法で数値化し、最低値は0.00、最高値は5.00となり、学内で行われる様々な選考の基準として用いられる。そのGPAが評価する学生の能力として、山田（2010）は中国地方を中心とした国立・私立大学学生への学習行動と学習意識の調査結果から、GPAは学生に「まじめさ」を求めるシステムであり、学生により良い成績を取る意識と行動を求めるものだと考察している。本学の学生を対象とした調査においても類似の成果が得られており（岡田ほか、2011）、授業に対して勤勉的受講態度を持ち、計画を立てて勉強に取り組むスタイルを持つ学生は比較的GPAが高い傾向にあることが報告されている。本稿では、岡田ほか（2011）の報告に

準じ、授業に対して勤勉の受講態度を持ち、計画を立てて勉強に取り組む学習スタイルを「まじめ」と定義する。「まじめ」な学生は、正課（授業）を通じて文学部の教育で得られる力を身に付けた学生であると言える。一方で、GPA はあくまで成績に基づく結果であり、GPA が伸びた要因や GPA が向上するとどのような能力が向上するかといった因果関係を GPA のみで検証することはできない。文学部では、学生の正課での学び（GPA の向上）が学生自身のどのような能力の向上に寄与しているのか明らかにするために、2017 年度より「PROG」テストを導入し、多面的な学習成果の検証を行ってきた。

3 「PROG」テストの概要と分析対象について

「PROG (Progress Report on Generic Skills)」テストは、河合塾と株式会社リアセックが共同開発したジェネリックスキルの成長を支援するアセスメントプログラムである。専攻・専門に関わらず、社会で求められる汎用的な能力・態度・志向＝ジェネリックスキルを測定する。テストでは、リテラシーとコンピテンシーの2つの観点から7段階で総合レベルを測定し、自身の現状を客観的に把握することができる。知識を活用し問題を解決する能力であるリテラシーは「情報収集力」「情報分析力」「課題発見力」「構想力」の4つの要素に分けて、5段階の到達レベルにて測定・評価する。また、「言語処理能力」「非言語処理能力」の2つに分類することもできる。コンピテンシーは、自分を取り巻く環境に働きかけ対処する力（経験を積むことで身についた行動特性で、経験を振り返り意識して行動することで育成される）を測定・評価する。「対人基礎力」「対自己基礎力」「対課題基礎力」の3つの大分類要素に分けられ、「対人基礎力」は「親和力」「協働力」「統率力」、「対自己基礎力」は「感情制御力」「自信創出力」「行動持続力」、そして「対課題基礎力」は「課題発見力」「計画立案力」「実践力」のそれぞれ3つの中分類要素に分解される。リテラシーは現実的な場面を想定して最適解を求めさせるオリジナル問題によって、単なる知識ではなく、学んだ知識をどのように活用できるかという実践的な問題解決能力を測定・評価する。コンピテンシーは、実社会の若手リーダー層の行動特性と比較判定することで測定・評価する。リテラシー・コンピテンシー共に、高いレベルと判定されるほど高い能力を有していると評価される。

本報告で使用するデータは、2017 年度入学生 970 名の内、1 回生 4 月入学時に「PROG」テストを受検した 939 名、および 2017 年度入学生の内 3 回生 12 月時に「PROG」テストを受検した 176 名を対象とした。また、1 回生時と 3 回生時の GPA と「PROG」スコアとの比較分析、1 回生時と 3 回生時の GPA と「PROG」スコアの変化量分析では、1 回生時と 3 回生時に 2 回「PROG」テストを受検した 175 名を対象に分析を行った。なお、3 回生時はキャリアセンターからも学生への受検案内を行い、就職ガイダンスと同時に受検会を実施するなど、就職活動と関連した周知を行ったため、比較的民間企業への就職希望度の高い学生が受検していると考えられる。

4 「PROG」テストの結果

まず文学部生のジェネリックスキルの実態を把握するために、2017 年度入学者の 1 回生時および 3 回生時の「PROG」テストの受検結果を、大学生の全国平均と比較した。大学生の全国平均のデータは株式会社リアセックより提供を受けた。なお、四年制大学文系のデータには、受検者数が多い順に文学部、経済学部、経営学部、法学部などの学生が含まれている。

本学文学部生（2017 年度入学者）は、入学時、全体として知識を活用して問題解決する力（リテラシー）と経験を積むことで身についた行動特性（コンピテンシー）が、ともに全国の四年制大学 1 年、四年制大学文系 1 年、四年制大学 1 年（文学部生のみ）の平均値よりも高い傾向にあることが分かった（図 1.1）。本学文学部生が進級し、3 回生の 12 月時に実施した「PROG」テストの結果では、大学生の全国平均に比べて、「リテラシー総合」の平均値の差は 1 回生時よりも大きくなっており、知識を活用して問題解決する力は大きく向上していると言える。一方で、本学文学部生の「コンピテンシー総合」の平均値は 1 回生時より低下している。「コンピテンシー総合」の低下の要因は、大分類要素の「対自己基礎力」や「対課題基礎力」は向上しているが、「対人基礎力」が 1 回生時よりも大幅に低下しているためと考えられる。更に、「対人基礎力」は四年制大学 3 年、四年制大学文系 3 年、四年制大学 3 年（文学部生のみ）と比べて、最も低いスコアとなっている（図 1.2）。ただし、3 回生時の受検者は、2017 年度 1 回生時の受検者の一部のため、本結果から「PROG」スコアの伸長度（変化量）を判断することは困難である。

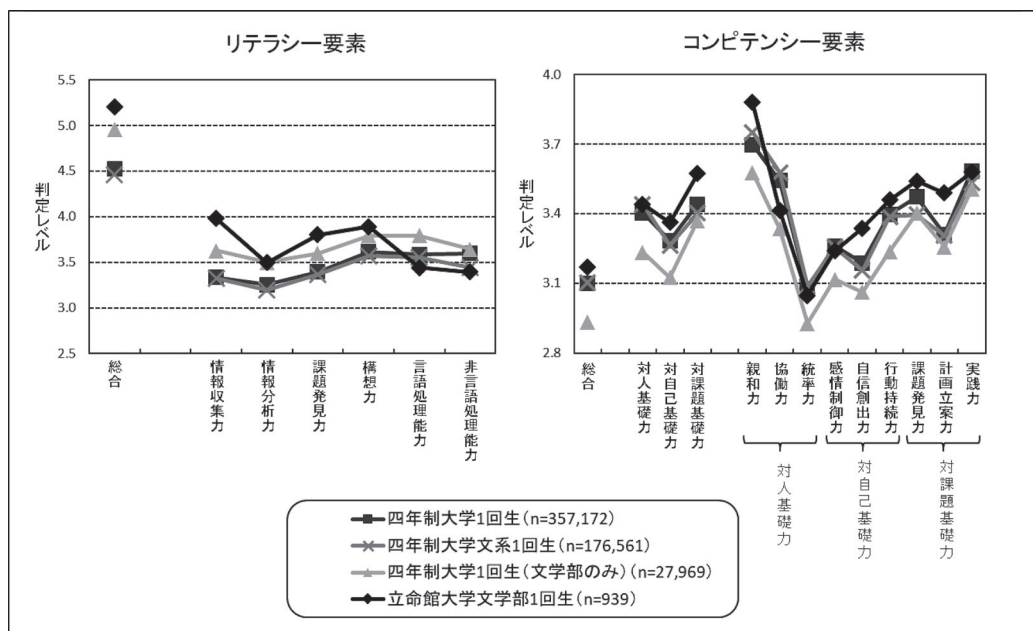


図 1.1 文学部 1 回生（2017 年度入学者）と全国大学 1 回生との「PROG」スコアの比較

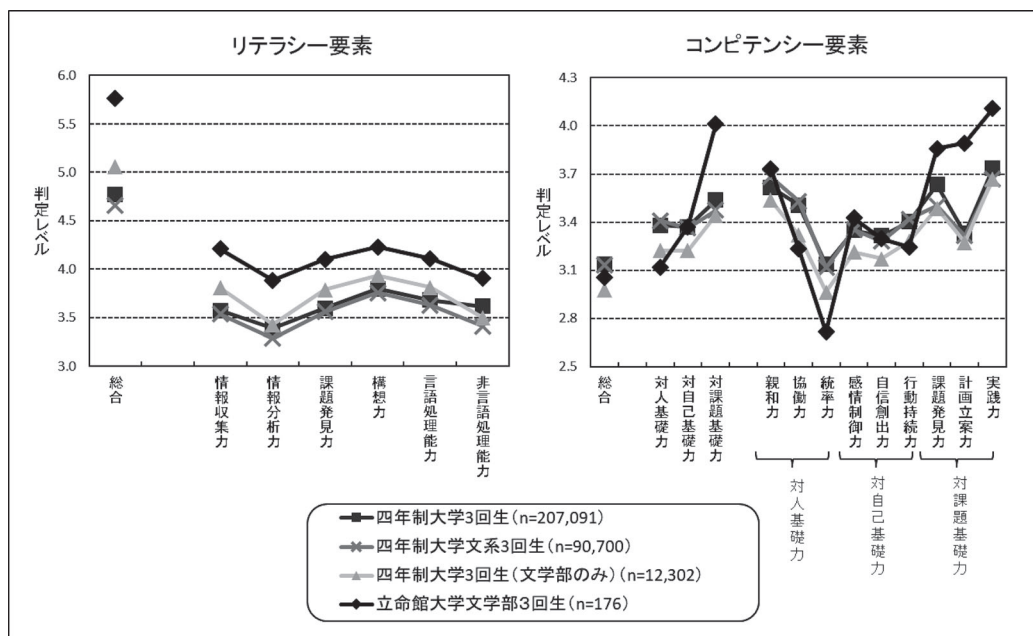


図 1.2 文学部 3 回生（2017 年度入学者）と全国大学 3 回生との「PROG」スコアの比較

続いて、2017 年度入学者の 1 回生時と 3 回生時の「PROG」テストの結果（1 回生時と 3 回生時両方を受検した学生 175 名のみを抽出）を比較した。リテラシーとコンピテンシーの両方の全ての要素でスコアの伸びが見られた（図 2）。この結果により、文学部生は正課・課外も含めた大学生活において、リテラシーとコンピテンシーの両方の要素が向上することが分かった。ただし、リテラシーの「情報収集力」、そしてコンピテンシーの「対人基礎力」については比較的伸び幅が小さい。

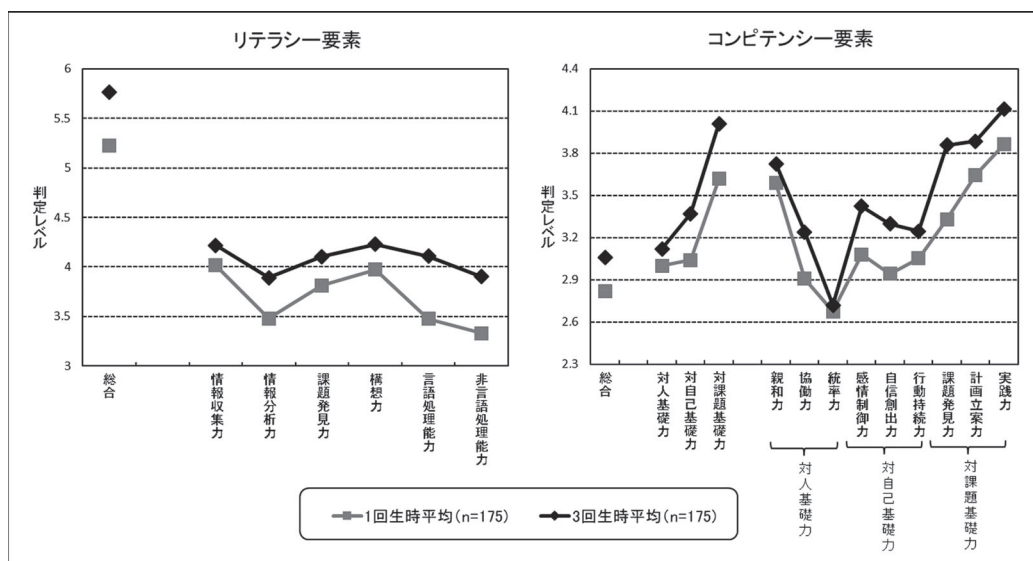


図 2 1 回生時と 3 回生時の「PROG」スコアの比較（2 回受検した学生のみ抽出）

5 GPA と「PROG」テストとの比較分析

5.1 GPA が評価している能力の検証

次に、GPA が評価している能力を明らかにするために、GPA と「PROG」テストのスコアの関係について比較分析を行った。1 回生時と 3 回生時の 2 回「PROG」を受検した 175 名を抽出し、2017 年度 1 回生時の「PROG」スコアと 2017 年度春学期 GPA との関係、そして 2019 年度 3 回生「PROG」スコア（12 月時受検）と 2019 年度春学期累積 GPA との関係を比較分析した。GPA を「2 以下」、「2 より大 3 以下」、「3 より大 4 以下」、「4 より大」の 4 群に区分し、「PROG」テスト受検時期ごとに GPA 区分別の「PROG」スコアの平均値と分散を算出した（表 1）。

一元配置による分散分析を用いて、「PROG」受検時期ごとに GPA 「2 以下」、「2 より大 3 以下」、「3 より大 4 以下」、「4 より大」の 4 群において「PROG」の「リテラシー総合」と「コンピテンシー総合」の平均値の差を検証する。帰無仮説は「4 群の『PROG』スコアの平均に差はない」である。一元配置分析の結果、「リテラシー総合」は 1 回生入学時、3 回生 12 月時ともに 5% 水準で帰無仮説が棄却され、「2 以下」、「2 より大 3 以下」、「3 より大 4 以下」、「4 より大」の GPA 区分ごとの「リテラシー総合」の平均値に有意な差があることが分かった。一方で、「コンピテンシー総合」では 1 回生入学時、3 回生 12 月時ともに 5% 水準で帰無仮説は棄却されなかったため、GPA 区分ごとの「コンピテンシー総合」の平均値に有意差がないことが検証された（表 1）。

また、1・3 回生時ともに GPA 区分が大きくなるほど「リテラシー総合」の平均値は大きくなることが明らかになった（図 3.1）。ただし、GPA 区分が「2 以下」の学生については、母数が少ないこともあるが、「2 より大 3 以下」の学生と比べて誤差の範囲内であり明瞭な差は見られない。従って、GPA が 2 より大きい学生は、GPA が大きい学生ほど「リテラシー総合」も大きくなると言えるが、GPA が 2 以下の学生については GPA と「リテラシー総合」に明瞭な関係は見出せなかった（図 3.1）。一方、「コンピテンシー総合」の GPA 区分ごとの平均値は、1 回生入学時、3 回生 12 月時ともに GPA とは明瞭な関係がない（表 1、図 3.2）。「PROG」のコンピテンシーと GPA に関係がないことは亀野（2017）などの先行研究とも一致している。分析結果より、コンピテンシーは、GPA では推し量れない能力を示していると言える。

表1 「PROG」受検時期、「PROG」要素、GPA区分(群)ごとの統計量一覧

「PROG」受検時期	「PROG」要素	GPA区分(群)	学生数	「PROG」スコアの平均	分散	P値
1回生入学時	リテラシー総合	2以下	7	4.71	1.92	0.03
		2より大3以下	37	4.86	1.58	
		3より大4以下	103	5.27	1.21	
		4より大	28	5.64	1.02	
	コンピテンシー総合	2以下	7	3.43	3.39	0.80
		2より大3以下	37	2.84	2.46	
		3より大4以下	103	2.77	2.78	
		4より大	28	2.82	2.93	
3回生12月時	リテラシー総合	2以下	4	5.00	0.50	0.01
		2より大3以下	35	5.37	1.43	
		3より大4以下	117	5.79	1.60	
		4より大	19	6.47	0.67	
	コンピテンシー総合	2以下	4	4.50	1.25	0.35
		2より大3以下	35	3.03	2.48	
		3より大4以下	117	3.02	2.65	
		4より大	19	3.05	1.94	

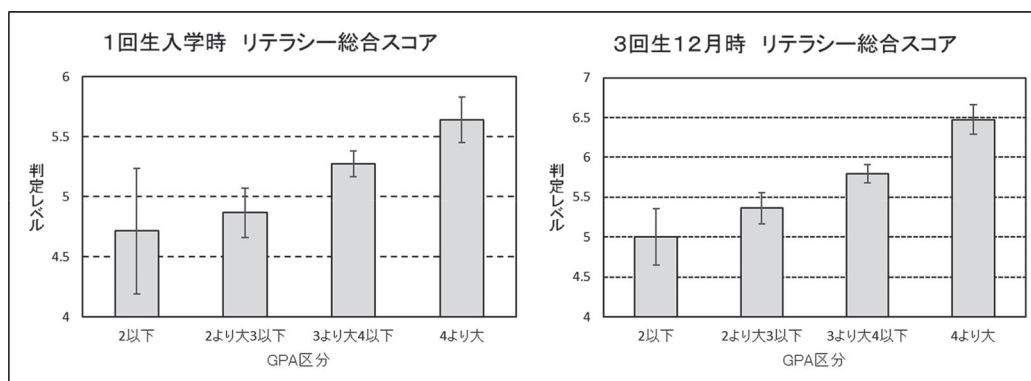


図 3.1 1 回生時および 3 回生時の GPA と「PROG」リテラシースコアとの関係

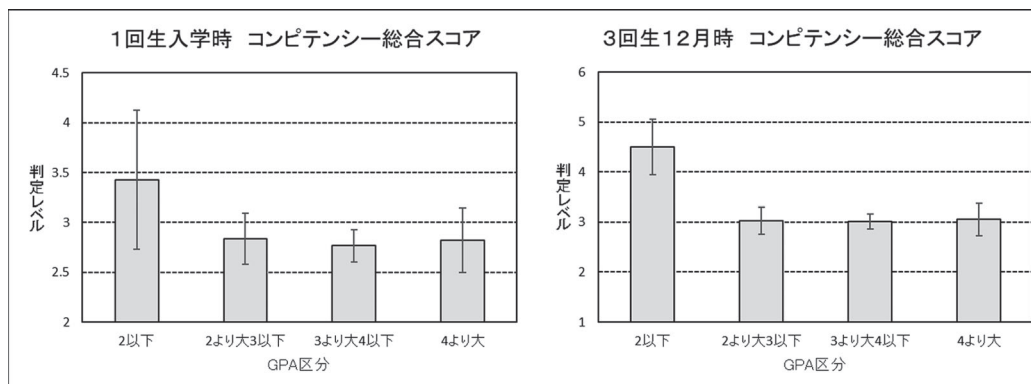


図 3.2 1 回生時および 3 回生時の GPA と「PROG」コンピテンシースコアとの関係

5.2 文学部の正課による学習成果の検証

続いて、文学部の正課での学びが学生のどのような能力の向上に寄与しているのかを検証するために、1 回生時から 3 回生時の GPA の変化量と、「PROG」テストのスコアおよびスコアの変化量の比較分析を行った。1 回生の春学期 GPA から 3 回生の春学期累積 GPA で GPA が上昇している学生は入学後に正課に「まじめ」に取り組んだ学生だと考えられる。一方で、GPA が下がっている学生は、正課への「まじめさ」が入学時よりも 3 回生時に低下している学生だと想定される。従って、本分析では 1 回生春学期から 3 回生春学期で累積 GPA が向上した学生（以下、GPA 上昇群）、累積 GPA が下がった（もしくは変化していない）学生（以下、GPA 下降群）の 2 区分に分けて「PROG」スコアとの関係を検証した。本検証により、GPA 上昇群と GPA 下降群のリテラシー・コンピテンシーの変化量の差が大きい項目ほど、文学部の正課を「まじめ」に取り組むことによって影響を受けやすい要素（能力）を示していると考えられる。

まず全体として、GPA 上昇群、GPA 下降群ともに 1 回生時から 3 回生時の間にリテラシーは全ての要素で、コンピテンシーもほとんどの要素でスコアが向上している（図 4）。

その上で、GPA 上昇群と GPA 下降群を比較すると、1 回生時のリテラシースコアは、「リテラシー総合」も含めて複数の要素で GPA 下降群が GPA 上昇群に比べて高い値を示しているが、3 回生時の「PROG」テストでは、「リテラシー総合」のスコアの逆転が生じ、情報収集力と言語処理能力以外で GPA 上昇群の方が高いスコアとなっている。コンピテンシースコアは、1 回生時は GPA 下降群の方が全ての大・中分類要素で GPA 上昇群を上回る。3 回生の「PROG」の結果でも「コンピテンシー総合」では GPA 下降群が上回るが、その差は全ての項目で小さくなるか、もしくは同じ値になることが分かった（図 4）。

次に、大学入学時の初期的な能力の差を取り除き、純粋な大学入学後の正課への取り組みがリテラシー・コンピテンシーに与える影響を明らかにするため、GPA 下降群と、GPA 上昇群の 2 つに区分して、リテラシー・コンピテンシーの 1 回生時と 3 回生時の変化量を抽出した（図 5）。変化量分析の結果、リテラシーの変化量は、「リテラシー総合」と大分類要素の「課題発見力」で GPA 上昇群が GPA 下降群に比べて有意に向上していることが分かった。一方で、「言語処理能力」は GPA 下降群の方が有意に向上している。コンピテンシーの変化量は、「コンピテンシー総合」と大分類要素の「対自己基礎力」「対課題基礎力」、そして中分類要素の「行動持続力」と「課題発見力」で GPA 上昇群の方が有意に向上していることが明らかとなった。一方、「対人基礎力」については、GPA 上昇群と GPA 下降群で誤差範囲を超える有意な差がないことが分かった。また、中分類要素では「親和力」「協働力」「実践力」の変化量の差が小さい。

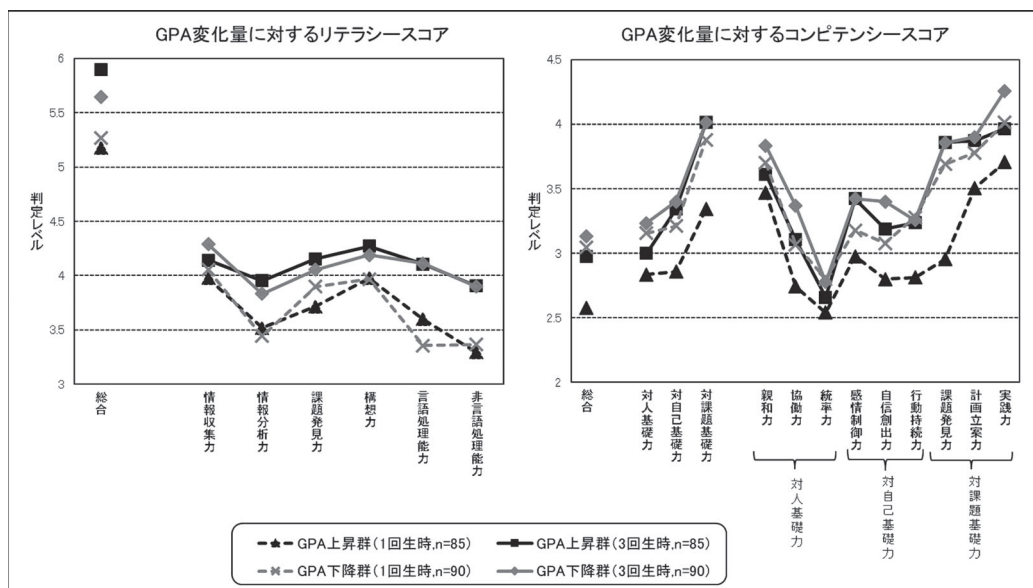


図4 GPA変化量区分ごとの1回生時・3回生時の「PROG」スコア

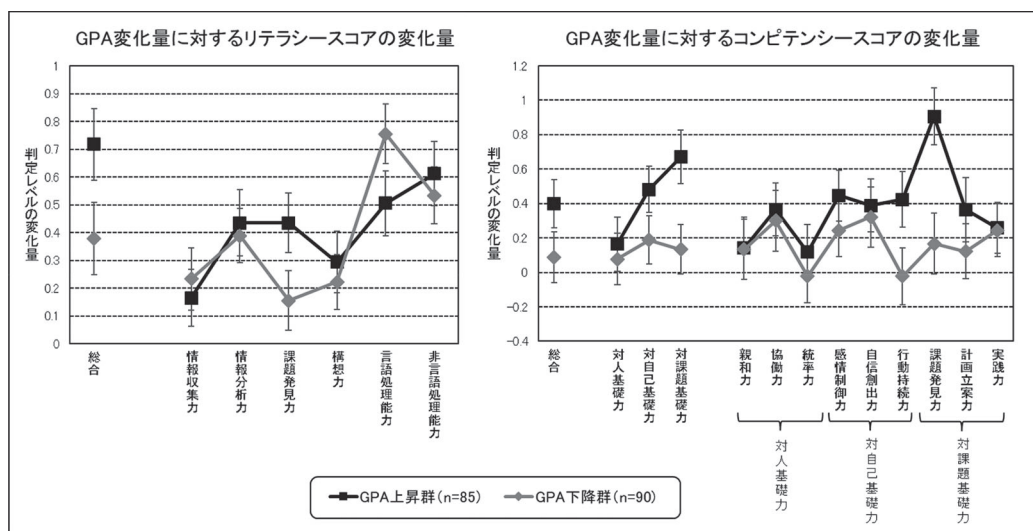


図5 GPA変化量区分ごとの1回生時・3回生時「PROG」スコアの変化量

6 正課を通じて向上する能力と要因について

これまでの分析で、文学部の正課に「まじめ」に取り組むことによって、「リテラシー」「コンピテンシー」ともに有意に向上することが検証された。特に「課題発見力」「行動持続力」の能力が向上することが明らかとなった。この「課題発見力」や「行動持続力」が向上した学生に対して、個別に成長要因を調べるためのインタビューを行い、「課題発見力」や「行動持続力」を

大学生活のどのような取り組みで伸ばしたのかを調査した。インタビュー対象は、3 回生時に「PROG」を受検した学生の内、「リテラシー総合」と「コンピテンシー総合」のスコアがともに 1 回生時より 3 回生時に向上した学生を 5 名抽出した。なお、以下の 2 つの理由により、インタビュー調査は外部の株式会社リアセックに委託し、表 2 に示す概要で実施した。1 つ目は、本学の学生生活の実態や文学部の教育に対する主観を可能な限り排除したデータを得るためである。2 つ目は、成長要因を直接聞いても学生からは確かなエピソードが出難いと考え、「PROG」の回答データを用いて行動変容の理由について質問する方法を用いた。そのためには、「PROG」の設問および回答とスコアの関係を示す詳細な情報が必要になるが、テストの構造に関する情報は公開されていないため、「PROG」の開発者であり、他大学でもインタビュー調査実績のある株式会社リアセックに依頼した。インタビュー調査結果は、株式会社リアセックが作成した「基礎力測定テスト『PROG』を活用した成長要因インタビュー調査ご報告書（2019 年度）」（以下「インタビュー報告書」とする）にまとめられた。

以下、学生のスコア向上につながったと考えられる特徴的なエピソードを紹介する。なお、紹介するエピソードは、インタビュー報告書に記載された内容を中心に、エピソードが発言された文脈やエピソードの背景が分かりにくい箇所については、インタビューを実施した株式会社リアセックの担当者へのヒアリングで補足したものである。

コンピテンシーの「課題発見力」を判定レベル 4 から 7 に伸ばした日本文学専攻の学生は、以下のように述べている。

文学部の 2 回生と 3 回生の小集団授業（基礎講読と専門演習）で、発表の際にレジュメを用意する過程において、調べるテーマを設定し、資料を多面的に調べて読んでから、自分の考えをまとめるようになった。最初は直感で有益な資料と無駄な資料を分けてしまっていたが、資料を読んでいくうちに意見が変わり、ぎりぎりになって変えたものの発表には間に合わないことがあった。今ではまず情報をたくさん集めてから総合的に有益なものを検討するようにしている。

このインタビューから、当該学生が小集団の授業によって、できるだけ多くの情報を集め、さまざまな角度、広い視野から現象や事実をとらえ、その背後に隠れているメカニズムや原因について考察し、解決すべき課題を発見する力（課題発見力）を培っていることが見て取れる。同じ学生から「文学部は授業のレポート課題が多く、レポートの提出までに自分でいろいろ資料を読んで完成させることが多い」との発言もあり、他学部比べてレポート試験の割合が高い文学部において、レポートの執筆を通じて様々な資料を探し、そこからテーマを見つけ出すといった学習を積み重ねることが「課題発見力」の向上に結び付いている可能性も考えられる。

また、リテラシーの「課題発見力」の判定レベルを 3 から 5 に伸ばした文化芸術専攻の学生は、次のように述べている。

1 回生の時の小集団授業で、自分が考えた仮説に対して、どういった文献を探せばよいか分からず、仮説に無理やり近づけるための資料収集や考察をしてみたが、先生から、「その傾

向の仮説ならこういう話の持っていく方がいい」や「この仮説にはこじつけがあるから、こういうふうに仮説立てた方がいい」といった様々なフィードバックをもらえた。はじめは辛かったが、失敗しても試行錯誤しながら、手順ややり方を改善していくのが得意になった。

このエピソードからは、授業を通じた仮説と検証の繰り返しと、教員からの質問・助言が、学生の「課題発見力」の向上につながっていると想定される。

「行動持続力」の向上にも同様の傾向が見られる。「行動持続力」を判定レベル3から4に伸ばした京都学専攻の学生は、小集団の授業と卒業論文を成長要因に挙げ、「基礎講読や専門演習を通じて、卒業論文をイメージしていかないといけなくなる。先行研究などを調べて、まだ明らかにされていない事象を明らかにすることに価値があると教員より指導を受ける中で、いかに自分らしいこだわりを大事にして研究テーマを設定するかを考えるようになった」と述べている。

これらのインタビューから、総じて、文学部の正課の中でも特に小集団授業での発表等を通じた教員からの専門的見地に基づく指導や助言、レポートのテーマ選びや作成、卒業論文に向けての検討によって、学生は「課題発見力」、「行動持続力」を身に付けていることが推察される。

表2 成長要因インタビュー調査の概要

1. 調査目的

1) 正課の授業等の学習経験を通じた学習成果の可視化
—どんな経験により、学生はどのように成長したのか
2) 今後の教育改善策の追求
—授業等をどのように改善することにより、学生はさらに成長できるか

2. 調査方法

個人インタビュー方式（1人当たり 約60分）

3. 調査期間

2020年6月9～10日

4. 調査対象

PROGスコアの伸長が著しい3回生の学生 計5名
— 人間研究学域 教育人間学専攻1名、日本文学研究学域 日本文学専攻1名、
国際文化学域 文化芸術専攻1名、地域研究学域 京都学専攻1名、
コミュニケーション学域 国際コミュニケーション専攻1名

5. インタビュアー

株式会社リアセック（奥田氏）

6. 質問項目

「PROG」コンピテンシーテストの回答ローデータを用いて、1回目から2回目にかけて
“行動特性が変わったきっかけ”を質問する。

例） 1回目受検（1回生時）

回答が変わった

2回目受検（3回生時）

	A	B
1	初対面の人と話すときには、距離をとって礼儀正しく接する	初対面の人と話すときでも、相手と距離をおかず親しく接する
2	客観的な情報よりも、人の気持ちや人間関係に配慮して判断を下してきた	感情に流されず、客観的な状況を分析して判断を下してきた

7 正課での学習効果と企業への就職との関係

最後に、文学部の正課で向上する能力および向上し難い能力と就職状況のデータの比較検討を行った。2020年7月現在、2017年度入学者が4回生に進級し、就職活動を行っている。2021年

卒以降の学生に対する「就活ルール」を日本経済団体連合会（以下、経団連）は廃止したが、政府は当面はこれまでの通りの就活ルールに沿った採用スケジュールを踏襲するとしており、2021年卒の採用スケジュールも例年同様に3月に会社説明会受付開始、6月から面接や選考が開始された。今回、本学キャリアセンターと相談の上、多くの企業の一般的な新卒採用時期である春採用が落ち着く7月下旬に焦点を当て、学生の就職内定状況のデータ抽出を行った。なお、本学キャリアセンターでは、学生一人ひとりに就職状況の把握のためのメールや電話での調査を行っており、就職状況把握率は毎年90%を超える。今回は、企業の春採用が落ち着いた7月上旬から中旬にかけてキャリアセンターから学生へ就職状況把握のための電話調査を行った後に就職状況のデータ抽出を行ったため、現時点での4回生の就職活動状況をおおよそ正確に把握できていると考えられる。また、2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、例年より同時期の就職内定率が低い傾向にある。本分析では、「PROG」テストを1回生時と3回生時の2回受検している学生175名に対して就職状況のデータを抽出した。

「PROG」スコアと就職状況の比較検討は、現時点で企業からの就職内定を獲得している学生（就職内定獲得者：75名）と、その内、特に日本を代表する大手企業から内定を得ている学生（著名250社内定者：8名）、そしてまだ就職内定が得られていない学生（就職内定未獲得者：100名）の3つの区分に分けて行った。分析の結果、リテラシーについてはほとんどの要素で就職内定獲得者の方が就職内定未獲得者より高いスコア（平均値）となったが、誤差範囲を超える有意な差は見られなかった。一方で、コンピテンシーについては、大分類要素の「対人基礎力」、そして「対人基礎力」の中分類要素である「親和力」「協働力」で就職内定獲得者が、就職内定未獲得者に比べて有意に高いスコアとなった。また、「協働力」では著名250社内定者が、母数8名と少ないものの、就職内定獲得者よりも有意に高いスコアとなっている（図6）。

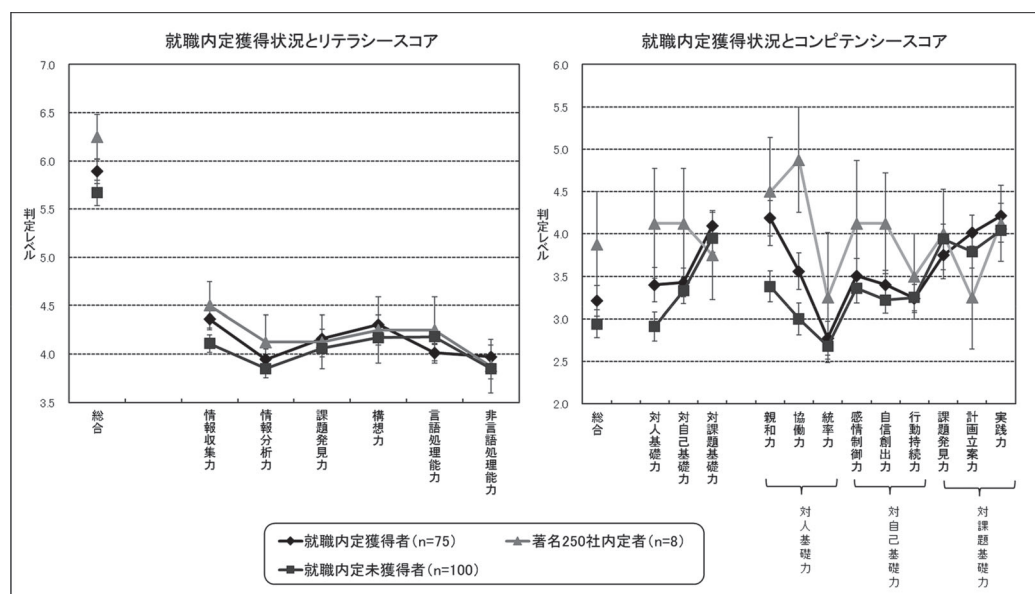


図6 就職内定獲得状況（2020年7月22日時点）区分別の「PROG」スコア

この結果から、卒業者の80%以上が企業等へ就職していく文学部において、「対人基礎力」を向上させるための取り組みの必要性が示唆された。他方、文学部の正課で培われる「課題発見力」および「行動持続力」においては就職内定者と就職内定未獲得者の間で有意差がなく、「課題発見力」においては就職内定未獲得者の方がスコアの平均値が高い。つまり、文学部の正課で培われる能力と、就職活動で評価される能力とは必ずしも一致していない。

一方、2006年時点のリクナビに新卒の募集広告を掲載した1万社の中から960社を無作為に抽出し、抽出した企業が選考基準として広告上に提示している言葉を「PROG」の各コンピテンシー要素に分類した調査報告がある（成田・松村、2014）。調査報告では、コンピテンシー要素の中で、「行動持続力」と「課題発見力」が最も多く掲載されており、「親和力」や「協働力」の掲載数は比較的少ない結果となっている。また、2018年に経団連が企業に実施した「高等教育に関するアンケート」でも、産業界が学生に期待する資質、能力、知識は「主体性」「実行力」「課題設定・解決能力」が「チームワーク・協調性」や「社会性」を上回っている。つまり、企業は選考基準において「行動持続力」（「PROG」では、「行動持続力」の小分類要素に「主体的行動」が含まれる）や「課題発見力」を持った人材を採用したいと考えているが、実際にはその選考過程で「親和力」や「協働力」に優れた人材を採用しており、選考基準と採用する人材との能力のギャップが一定生じていると推察される。もし企業側で選考基準と採用する人材で能力のギャップが生じているならば、企業は採用選考において求める人材を十分に採用できていない可能性も考えられる。ただし、今年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、企業の面接試験などはオンライン等での実施が多数を占めており、選考過程が例年と同じ条件ではなかった可能性がある。次年度以降の就職内定状況と PROG スコアの関係も確認する必要がある。

8 考察

8.1 文学部の GPA が評価する能力について

GPA と「PROG」テストとの比較分析により、GPA が2より大きい学生は GPA が大きいほど、「リテラシー総合」のスコアも大きくなる関係があるが、「コンピテンシー総合」のスコアと GPA には顕著な関係が見られない（図 3.1、図 3.2）。GPA が2より大きい学生は、1 年生・3 年生ともに文学部生の約 90% が該当する。この結果より、文学部の GPA は主に「知識を活用して問題を解決する力」（「PROG」のリテラシー要素が示す力）を評価していると考えられる。一方、コンピテンシーが表す「自分を取り巻く環境に実践的に対処する力」（対課題基礎力、対人基礎力、対自己基礎力）については、GPA では評価できていない。

2007 年の学校教育法の改正以降、高校の学習指導要領において主体性や思考力、表現力等のいわゆるジェネリックスキルの養成が求められている。また、経済産業省は 2006 年に「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として社会人基礎力を提唱し、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」などの重要性を述べている。高大接続、そして大学と社会との接続を考える上で、大学教育でジェネリックスキルを養成・評価することは必要であり、GPA で読み取れないコンピテンシーの能力をどのように評価していくのが今後の文学部の課題である。

8.2 正課で向上する能力と向上し難い能力について

まず前提として、文学部生は大学生活を通じてジェネリックスキル（リテラシー、コンピテンシー）を向上させていることが分かった（図2、図4）。

その上でジェネリックスキルの向上に正課が与える影響を抽出するために、GPA 変化量区分ごとの「PROG」スコアの変化量分析を行うと、GPA 上昇群は GPA 下降群に比べて「リテラシー総合」のスコアがより大きく向上している（図5）。この結果は、GPA と「PROG」との比較分析で、GPA が大きくなるほど、リテラシーのスコアも大きくなる関係（図3.1）とも整合する。つまり、入学後に GPA が向上した学生（GPA 上昇群）は、正課を「まじめ」に学ぶことで「知識を活用して問題を解決する力」（リテラシー）が向上すると言える。

また、GPA と「PROG」の比較検討結果では GPA とコンピテンシーに明瞭な関係はない（図3.2）が、GPA 変化量区分ごとの「PROG」スコアの変化量分析では、GPA 上昇群のコンピテンシースコアの変化量（上昇幅）が GPA 下降群より有意に大きい（図5）。この解釈として、GPA の変化量がコンピテンシースコアの向上に影響を与えている可能性が考えられる。分析結果では、GPA 上昇群は、ほとんどのコンピテンシー要素で GPA 下降群より向上しているが、特に「課題発見力」「行動持続力」が有意に向上しており、正課に「まじめ」に取り組むことで、「さまざまな角度から適切な情報源と手段で情報を収集し、広い視野から現象や事実をとらえ、そのメカニズムや原因について考察して解決すべき課題を発見する力」（課題発見力）や「自分にとって必要だと思ふ事柄に継続して取り組んでいく力」（行動持続力）が培われることが推察される。「課題発見力」「行動持続力」の向上は、小集団科目（基礎講読、専門演習）での発表や研究テーマを考え、資料を作成し、発表用資料を作り上げる学びや、レポート課題による文献調査や執筆、卒業論文に向けての検討が影響していると考えられる（図7）。

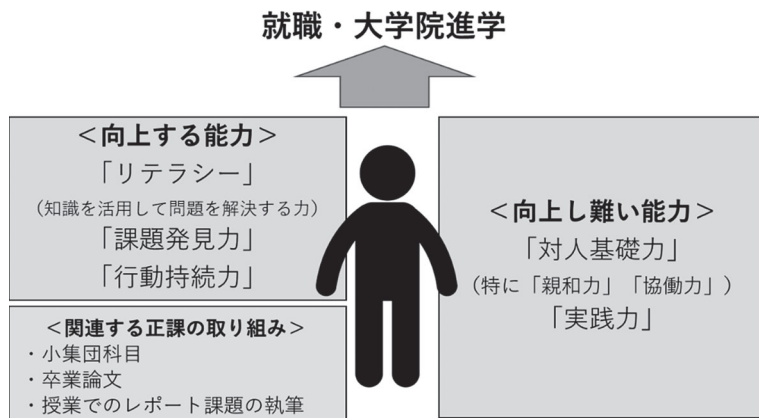


図7 文学部の正課で向上する能力と向上し難い能力を示した概念図

一方で、文学部の正課では身に付きにくい能力も挙げられる。まず、GPA 上昇群と GPA 下降群で、リテラシーの「情報収集力」と「言語処理能力」は GPA 下降群の方が1回生時から3回生時の伸び幅が大きい。従って、上記2つの能力は正課をまじめに取り組んでも向上し難い能力であると言えるが、GPA と「PROG」の比較検討結果より GPA が大きいほど「リテラシー総合」

のスコアも大きくなる関係が明らかとなったため、ここでは「リテラシー総合」に包含される個別の要素までは言及しないこととする。また、コンピテンシーの大分類要素である「対人基礎力」の変化量は、GPA 上昇群と GPA 下降群でほとんど差がない（図 5）。また、中分類要素では「親和力」「協働力」「実践力」の変化量に差がないことが分かった。このことは正課を「まじめ」に取り組んでも「対人基礎力」（特に、親和力、協働力）や「実践力」の能力が向上し難いことを意味している。特に「対人基礎力」については、3 回生時点で全国の大学生平均（図 1.2）と比べても本学文学部生の平均値は極めて低く、一方で就職では重視される要素であるため、「対人基礎力」向上を図るための取り組みが不可欠であると結論付ける。

9 「対人基礎力」の向上を図るための施策

正課では向上し難い「対人基礎力」（特に「親和力」「協働力」）の要素をどのように能力形成していくかについて、文学部の集中拡大企画委員会（2020 年 7 月 21 日開催）で、文学部教員間の意見交換を行った。文学部では、1 回生配当の小集団科目「研究入門」において、全ての学域でグループワークを導入しており、協働学習に力を入れている。一方で、近年、学生の質の変化が見られ、以前よりもグループワークを行うことが難しくなっているという意見や、年々、全体的に授業の課題の量が多くなっており、個人の授業課題を行うために、放課後にグループで集まって課題に取り組むとういことが難しくなっているという意見、その他にも SNS の影響が直接的なコミュニケーションの量を減らし、学生が他者と協働する機会を減らしているのではないかという指摘などもあった。授業内でグループワーク等の実践は行っているものの教員側も学生の「対人基礎力」の向上には苦慮しているという状況が見えてきた。

グループワークは他者との関わり合いの中で役割や信頼を構築し、チームとしての経験を積んでいく作業であるため、「対人基礎力」の向上に寄与する学びのスタイルであると考えられるが、実際には十分な効果が出ていない可能性がある。そのため、学生実態に合わせて、グループワークの方法をより「対人基礎力」を高められる形へと転換する必要がある。合わせて、GPA では測れないコンピテンシーの能力を評価できるようにルーブリック評価を取り入れるなど、評価方法を工夫することも必要であると言えよう。文学部の中でも、言語コミュニケーション専攻（2020 年度より言語コミュニケーション学域に改編）はグループワークの設計や評価方法について、学問的知見を取り入れ、独自に工夫を行っている。今後は言語コミュニケーション学域の事例を、FD を通じて文学部全体に共有するなど、学部内での成功事例を共有していくことも効果的であると考ええる。

また、溝上（2009）は、全国の学生調査において、学習にも意欲的で、サークル・クラブ活動や趣味も重視し、人間関係も大切にしている学生が、大学生活を通じて自分が成長している実感が最も高いと結論付けており、「対人基礎力」を向上させるために課外活動を取り入れることも効果的であると考ええる。本学の学園ビジョン R2020 の後半期計画における「学びの立命館モデル」の構築の中で、正課外の自主的学び、諸活動への参加率 90% が目標に掲げられているが、文学部生の課外活動団体への参加率は 65% 程度と決して高くない。課外活動への参加を促すことも重要な施策の一つと考える。

更には、文学部では正課で学んだことを中心に学術的な発展と交流の2つの目的でゼミナール大会を開催している。文学部生であれば1回生から4回生まで誰でも参加でき、学生が個人またはグループで正課に関わる学習・研究成果を発表する場となっている。正課で深めた学びを人に伝え、周囲の学生の多様な考え方を学ぶことができる最良の機会であり、「対人基礎力」とも結び付く能力形成が期待できる。一方で、現状、ゼミナール大会の参加者数は毎年10組以内で、且つ、ほとんどが個人発表となっており、多くの学生が参加しているとは言い難い。また、現在はゼミナール大会と正課との結び付きが弱い。小集団科目（研究入門、基礎講読、専門演習）で議論・検討した内容をゼミナール大会でグループ発表するというような流れを作り出すことも一つの施策であると考えられる。

以上、正課では授業内でのグループワーク等の協働学習の質を高めること、そして課外活動を通じて、学生同士が協働する機会を増やし、多くの学生の参加を促すことで、正課で身に付けられる「リテラシー」や「課題発見力」「行動持続力」などの能力に加えて、「対人基礎力」についてもバランスよく能力形成ができると考える。合わせて、「対人基礎力」を含むコンピテンシー要素の評価軸を作ることも必要である。今回検証された成果を、今後、文学部において正課・課外でどのように改善につなげていくのかについて、実践を交えながら引き続き検討していくこととする。

謝辞

本稿の作成にあたり、専門的な立場からご指導・ご鞭撻をいただいた立命館大学スポーツ健康科学部の河井亨准教授、文学部の取り組みとして議論や推敲にご協力いただいた文学部執行部の先生方および玉井弘美事務長、就職に関わる情報およびデータ提供などに関わってご支援いただいた本学キャリアセンター、そして「PROG」テストの実施や結果の分析、学生へのインタビュー調査そして大学生の全国平均のデータ提供にご協力いただいた株式会社リアセックの奥田寛司様に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 岡田有司、鳥居朋子、宮浦崇、青山佳世、松村初、中野正也、吉岡路「大学生における学習スタイルの違いと学習成果」『立命館高等教育研究』、2011年、第11号、167-182頁。
- 株式会社リアセック「基礎力測定テスト『PROG』を活用した成長要因インタビュー調査ご報告書（2019年度）」、2020年（未公刊、筆者保有）。
- 亀野 淳「大学生のジェネリックスキルと成績や就職との関連に関する実証的研究—北海道大学生に対する調査結果を事例として—」『高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習』、2017年、24巻、137-144頁。
- 高等教育に関するアンケート結果（2018年）については、一般社団法人日本経済団体連合会のWebサイトより引用。 <https://www.keidanren.or.jp/policy/2018/029.html>（最終閲覧日：2020年10月10日）
- 笹川篤史「PROGテストを利用した学生の能力伸長分析について」『長崎大学経済学部研究年報』、2015年、第31号、1-23頁。
- 大学審議会「21世紀の大学像と今後の改革方策について」（平成10年10月26日）。
- 中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（平成20年12月24日）。
- 中央教育審議会大学分科会大学教育部会「『卒業認定・学位授与の方針』（ディプロマ・ポリシー）、『教育

課程編成・実施の方針』（カリキュラム・ポリシー）及び『入学者受入れの方針』（アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン」（平成 28 年 3 月 31 日）。

成田 秀夫、松村 直樹「ジェネリック・スキル測定の試行と分析の報告」『PROG セミナー報告書』、2014 年、15-22 頁。 <https://www.kawaijuku.jp/research/prog/event/pdf/2014seminarreport.pdf>（最終閲覧日：2020 年 10 月 10 日）

PROG（Progress Report on Generic Skills）については、株式会社リアセックの Web サイトより引用。
http://www.riasec.co.jp/prog_hp（最終閲覧日：2020 年 10 月 10 日）

松下佳代『〈新しい能力〉は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房、2010 年。

松下佳代「アクティブラーニングをどう評価するか」松下佳代・石井英真編『アクティブラーニングの評価』東信堂、2016 年、3-25 頁。

松下佳代「学習成果とその可視化」『高等教育のニューフロンティア（高等教育研究第 20 集）』玉川大学出版部、2017 年、93-112 頁。

溝上慎一「『大学生活の過ごし方』から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す」『京都大学高等教育研究』、2009 年、第 15 号、107-118 頁。

山田浩之「地方大学における学生の学習行動と学習意識—大学の学校化がもたらす学習の形骸化」『比治山高等教育研究』、2010 年、第 3 号、37-48 頁。

Educational Features and Issues in the College of Letters:

Evaluation of Multifaceted Learning Outcomes

OKAMOTO Shin'ya (Administrative Staff, College of Letters, Ritsumeikan University)

ONO Masahiro (Administrative Staff, College of Letters, Ritsumeikan University)

KAWANABE Takashi (Associate Professor, College of Letters, Ritsumeikan University)

SAKASHITA Fumiko (Professor, College of Letters, Ristumeikan University)

Abstract

Based on the objectives outlined in the “Academy Vision R2020,” the College of Letters at Ristumeikan University has promoted the “learner-centered education” through the practice of inquiry-based learning in small group courses and graduation thesis seminars. Not only have these classes tried to help our students acquire specialized knowledge in their later years in college; our first-year education has also aimed at fostering students’ generic skills by incorporating groupwork and joint presentations into small classes. These educational efforts in the regular curriculum at the Collge of Letters, however, have never been fully scrutinized in terms of learning outcomes; that is, how they have actually contributed to the advancement of students’ generic skills. What kind of skills does GPA represent at the College of Letters? Which skills are easy (or difficult) for students to acquire through our regular curriculum? In order to clarify these questions, this paper analyzes the chronological improvement of students, by comparing their scores of GPA and the PROG (Progress Report On Generic skills) in their first and third years (2017 and 2019 respectively). The result of this study is to further improve the educational environment at the College of Letters.

Keywords

the College of Letters, Institutional Research (IR), evaluation of learning outcomes, generic skills, literacy, competency, GPA, students’ career